

書作品制作の学習指導について

——臨書と創作の相関に関する考察——

森 哲 之

はじめに

書作品には、臨書と創作がある。臨書は、書の基本的な学習方法であり、書の古典資料等を見て書くことである。そして、学習者は対象古典の書法を習得しながら、書そのものの理解を深めてゆく。臨書には、自身の技法の向上に努める習作の類から、鑑賞の対象として制作意図を有する創造性豊かな臨書作品までもが見られる。また、書の創作では、基本的には純然たる創造性が問われるが、指導者等の手本を書写するに近いものから、独創的書法の開拓に至るものまで幅がある。これらの差異は、学習者の目的や目標の段階によるものである。そこで、学習者がどのような書作品を目指すのか、それに伴い、指導者はどのような書の作品を導き出そうとし、表現や鑑賞の力を付けさせようとするのか、それらの関わりについて考えてゆきたい。本稿では、広島文教女子大学人間科学部人間文化学科（芸術文化コース・書道専修）における演習科目「人間文化専門演習Ⅱ」（卒業制作）の学習を中心に、書作品の制作過程について触れ、臨書と創作の書表現における相互作用について考察する。

1. 書の教育の一例として

書の学習では、文字を知り、書き、その造形美や特質を解釈してゆく。その理解には、書の歴史、書論や鑑賞等の理論面が重要であるが、ここでは、書作品制作における表現面を中心として、書の作品が形成される過程において享受される内容と表出される内容との関係を見る。学書の方法としては、古典の臨書行為、臨書による作品化、倣書、創作、そして、創作の過程においてさらに必要となる古典の鑑賞等という一連の流れが考えられる。臨書作品、創作作品を制作する際、その過程は一方向ではなく、反復されることとなる。つまり、臨書と創作の双方に、享受と創造の構造を考えることができそうである。

現在、書道を専門的に学習することのできる大学等では、大小様々な制作展を開催し、作品発表の機会を設けている。作品としての形を成し、披露し、学習の成果を問うことは大変意義深く、現代の生活や環境に書をどのように活用できそうか、様々な視点でその価値が問われてくる。その際に臨書作品のあり方をどのように考えているか、書の創作作品の枠組みや独創性をどのように考えるかにより、それぞれに特色が現れている。

まず、本学科の書に関わる科目の概要について触れる。本学科専門教育科目の中、「芸術と文化」の領域では、書道や美術に関する23授業科目を備える。なお、書道に関わる科目は、高等学校教諭一種免許状（書道）取得に対応する。制作展に関わる演習科目として、2年次「人間文化基礎演習」及び3年次「人間文化専門演習Ⅰ」では、学内外の制作展にて作品発表（3年次後半より卒業制作演習）を、4年次「人間文化専門演習Ⅱ」に、卒業制作展にて作品発表、及び『芸術文化 卒業作品集』の作成をさせている。なお、本学科芸術文化コースには美術及

び書道専修があり、共通した課題目標において、制作展を合同開催している。美術との関わりにおいては、柔軟な発想、素材や表現の幅、独創などに書の学習者は刺激を受けている。一方、書の学書法や黒白に凝縮されたシンプルな抽象表現等に美術の学習者も高い関心を示している。

「人間文化専門演習Ⅱ」では3点の作品制作が課題であり、うち、書分野は臨書1点及び創作2点である。広島県立美術館地階県民ギャラリーにて開催し、壁面空間を活用する。学科改組前の文学部国文学科書道専修から継続し、小品から全紙二枚継ぎ8幅程の大作まで様々な書体や書風にて制作する傾向にある。指導体制については、美術・書道の複数教員による。第一義は、学生が主体的に自由な発想で制作を行えることを重視し、なおかつゼミによる指導体制を持つ。制作の途中段階において、複数の教員が関わりながら批評に当たり、学生はそれぞれの状況に応じて、指導を受けることができるようにしている。効果としては、多方面からの問題発見、解決に繋がり、客観性をもった制作が行えることが考えられる。また、様々な観点から作品批評が行われることにより、書の総合的な見方が養われ、学習者独自の制作意図も明確になる。

学習者の作品構想については、3作品の関わりやテーマ性等、個々の特色が発揮されるよう留意している。展覧会の企画、立案、運営を含め、書の制作に関わる総合的な学習として位置付けている。作品集編集については、主に学習者の3作品の写真掲載、及び制作意図をまとめさせている。この制作意図は、制作過程に伴い順次書かせ、制作上の問題点、不明な点、次段階の課題等が浮き彫りとなる。このことも客観的に制作方法を見つめさせる手掛かりとなっている。

2. 臨書作品制作における学習指導

臨書における古典の選択は、学習者が以後に創作することを前提とし、最終目標としては、自身の書風を築くことにあろう。そのため、様々な種類の古典を比較しながら学習してゆくことになる。ある書体が書けるというのが目的ではなく、同書体であればその書風の相違を厳密に捉えることになる。漠然とした書体感覚では、平均化した画一的な書の捉え方に終始してしまい、個々の特質に迫っていくことが困難になる。ここでいう書の古典は、広義に学書の対象とする古人の書全般を指し示す。

現在では、各種新出の文字資料等、さらには従来では学書の対象と考えていなかったものも、創造の源とされ、柔軟に受容されている。これは、従来の書作品の型に収めてきた発想の転換でもあり、書作品としての枠組み自体が新たに創出される傾向にある。書作品制作においては、どのような書を目指すか、目的が具体的かつ明確なことが肝要であり、制作状況に応じて、次第にその方向性に合致する古典を選択することもできる。古人のいずれの書も、それ以前の古典等何かしらに典拠があり、そこに基づく制作過程がある。つまり、参考作品としたものから時代を遡って学書してゆくことが考えられる。

臨書において、学習者は古典の筆意を解釈してゆく。その際、精査な書の捉え方が求められる。先入観なく、文字の結体、点画の長短、方向、線の太細、墨量、潤渴の変化、布置、余白等を、原本との比較を通してデッサンに近い作業を行い、書字の構造、章法を厳密に辿る。そして、それらの仕組みや形が、どのような必然性をもって運筆されたのかを推測しなければならない。古典の性格、遅速緩急の変化、線質、律動、筆脈、筆勢等が、原本の筆者の筆意に適正かを判断するのである。まずは、古典の内容や背景を知ることであり、同時代の特色を比較

分析し、その古典の個性、また、他の古典との相違性を明確にする作業といえる。学習者と指導者の共通認識は、原本そのものであり、そこでは双方の主観を除いた客観的な解釈を重視する。

次に、臨書作品の大作を制作することを一つの目標として考えてゆくこととする。臨書の大作については、古典の良さを再現するのに大きな紙面に表現してみたいとの考えや、また、創作に繋げるべく大書を書きたいと考えるときに、創作の前提として見立ての意義が考えられる。基本的な用筆法は、小品や大作の別にかかわらず同一である。筆墨紙等の性質により技法的工夫は必要とするが、全体構成を把握し、規模に応じた身体の律動を捉え直し、さらに筆意に一貫性を求めてゆく。

学習者の立場が、臨書を習作と位置づけ学習の経過を提示する目的であれば、できる限り原本に肉迫することになろう。また、芸術作品としての発表を目的とする臨書であるならば、創作と同様の制作意図、目的、意義等を考えてゆくことが必要となる。臨書において独創性を問うことは、創作への糸口となる。古典等を再現する方法は、古来より幾度も試みられ、創造性に富む臨書例も見られ、各々独自の書法を古典に重ね合わせ、創作の展開を臨書作品において発揮させているのである。臨書作品の制作では、古典をどのように再現するのかを明確にすることが肝要であり、そこに臨書を作品化する意義が見いだせよう。臨書では、書の古典を学習し、さらに、自作品として何かしらの制作意図を持ち、原本の再構成、再構築を試みることができる。古典からは普遍性が養われ、基礎書法の形成に繋がる。さらに、作品としての性格を重視した時に、古典等を基盤としながらも個性や創造性を発揮させる創作的価値のある臨書作品が考えられる。

3. 書の創作作品制作における学習指導

書の創作は、書きたい言葉と同時に、書きたい書表現があるという制作動機に始まる。語句や詩文の意味内容に学習者自身の感情や思いが反映され、書表現への発想に広がりが出てくる。書の創作の学習では、まず、書かんとする語句や詩文に意を払いたい。書きたい言葉をどのように書くかは、古典の書、近代や現代の様々な書作品に見られるような魅力ある造形からの選択といえる。その書体や書風、様式等、また、広く様々な芸術の造形性にヒントを得て、自由な発想による創造が望まれる。

書の創作作品を制作する際、制作意図、目的、意義等を考える。書作品がどのようなところで、どのように活用され、どのような効果があるかということである。作品は、飾る場所の空間、情景、雰囲気大きく変える。また、主体となる書表現においては、いかに独創的に表現されるかが重要である。このことは、普遍的な書の性格を踏まえた独創性であると考えられる。

演習における指導では、書の創作の基本を、自由な考えや発想をもって書くこととして設定し、書式や作品の枠組みに幅を持たせた自由度の高い唯一無二の書作品の制作を考えさせている。前提としては、現在までに見られるあらゆる書を対象とし、個々の持つ書に対する固定観念を少しでも柔らげていき、従来の書式に収めることに限定する制作ではなく、より積極的に具体的な作品発表の場や様式を想定させようとした。なお、篆書、隸書、草書、行書、楷書、仮名等の基礎的な学習を踏まえた上で展開している。そこで、長短様々な言葉を大小様々な紙幅に書く際に、一貫した必然性が重要である。また、テーマ性をもった抽象的な書表現も範疇に加えることもできよう。ただし、評価に値する内容で、できる限り幅広い可能性を追求させている。

ある程度の作風の方向性や種別等を考える時、大きく二つの観点があるが、それは作品様式を検討することと書風を形成することである。書風の形成には、創作しようとする書に性質が近い古典を選択させ、古典の筆意を検証し書法の獲得に努めさせる。また、倣書による確認をさせ、着実な基盤作りを徹底させる。

次に、創作における文字数の多少について、多字数の書は、およそ一字書や少字数書の集合体と考えることもできる。いわゆる一字書、少字数書の制作方法を辿ることにより、文字をどのように表現してゆけばよいか、その方法を探る。まず、一字書の創作作品制作の学習過程を考える。学習者が一文字の書の大作を書こうとする時に、単純に大きく書くだけでは、作品として成立しにくい。そこで、線質や造形の変化を考えることになる。その時に学習者としての創意が求められ、その典拠は、自ら選択した古典等に基づくことになる。ここに指導者の主観が入ってしまうと独創性が失われる。つまり、学習者が選択した古典等がどのような特質や価値があるのかを確認し基準としながら進めることになる。古典等の選択は柔軟にして、制作過程に応じて変化してゆき、近代や現代の作風を追求することもあろう。学習者が主体的に制作を進めることが、独創を生み出させる姿勢に繋がるものと考えられる。

一方、現代に活用される書作品のあり方は多様化し、備える、飾るなどの活用の意識が、現代の書作品制作には薄れている感がある。現代の住環境や空間に見合う書作品を生かす枠組み作りが必要である。どこに飾るか、どのように活用していくものなのか。額に収め、軸に仕立てること等が当然ではなく、より具体的に鮮明に意識化すると、書の表現そのものが変化する可能性がある。現代に求められる書は、形態や型、寸法等の枠組み自体が変化してきている。書の伝統を継承することは重要なことであり、型や書式を一旦は通り、本来的、伝統的手法を正確に理解した上で、より現在の視点で書作品が活用される方法を模索する必要がある。つまり、現代に生かす方法や書表現が他にないかを検証するのである。いわゆる明清の長条幅や対聯などは、その時代や国での必然的な産物であり、過去には見られなかった新様式であったはずである。それに伴い、独創が生じてきている。どの時代の書にも、時代特有の作品観があり、それぞれは、それ以前にない新たな表現を開拓し続けている。また、作品には時代特有の性質があり、例えば近代には近代の文化に根ざした様式美があるので、現代の学習者は、現代に相応しい書の様式を創造してゆくことになろう。創作の過程において参考とする近代や現代の書人の書作品を、追体験することも有益な方法と考える。ただし、そこに拘泥せず、書の創作作品では、独創性を見だし、基本的には独自の書法が開発されるべきであろう。

書が真に生かされるためには、書作品を積極的に活用させることであり、飾るという意識が必要である。美術館の壁面に飾るということは、引いては、現代の建築空間に書をいかに生かそうとするものなのかを問うことでもある。このような大舞台の想定において、書作品による効用を考え、ともすれば、壁面空間を演出してゆく書表現の意識が、現代に活用される書として制作する枠組み自体の創造となる可能性がある。

4. 臨書と創作の書表現における相関

臨書作品制作における学習者の観点を挙げてみる。まず、古典の選択については、個々の関心による。古典に見られる書表現の純粋な理解を目的とし、具に観察してゆく。基本的には、正確な書表現の特質の解釈を主眼としつつ、創作としての方向性や基盤に繋げてゆくことができる。古典選択の動機や理由は重要であり、何に惹かれ感動したのかを明らかにしてゆく作業でもあり、古典をその筆者がどのように成立させたかを追体験することになる。原寸大で復元

的に原本を把握してゆく方法や、半紙等による客観的分析にて正確な用筆、運筆等を繰り返し確認する方法、条幅での全体構想、大きさ、書式の検討等が考えられる。また、その際、古典の筆者やその書かれた時代、古典の文章の内容を知ることが、書表現の理解を助ける。

さらに、学習者が作品として成立させる制作意図を加味し、様々な様式、作風により創意工夫する余地がある。このことが、創作への動機に繋がることになり、作品化する際の形態、寸法、字大、文字の配列、落款や印等のイメージが徐々に具現化されることになり、作品の形状に応じた書式が考えられる。創作同様、その他にも現代としての新たなコンセプトやテーマ性をもつ作品構成の検討も考えられる。また、近代から現代にかけての幅広い作品例などからは、その評価や特質、型を見いだすことが必要である。

次に、書の創作作品制作における観点を挙げる。まず、書きたい文字や語句、詩文等の題材の吟味を心掛けたい。言葉の面から書表現が形成されてゆく場合と、古典等の文字の造形面から書表現が形成されてゆく場合とがある。

特に、創作においては、作品観をより意識することが必要とされる。従来 of 書式に則る方法もあるが、現代の書表現としての作品の意義を積極的に考慮したい。展示の場として、美術館等の壁面、床の間、生活空間等がある。それらに応じた作品の形についても、額、パネル、軸、扁額、聯、屏風、衝立、卷子、折帖、実用、その他があり、それぞれの書式がある。作品構成、文字の配列、寸法、落款及び印の位置等により、書体や書風の展開は広く考えられる。自己の書風の基盤としたい古典から、臨書による確認、その倣書を経て、堅実に作品を形成する方法がある。具体的な制作過程については、臨書同様であるが、草稿を様々な観点より試行錯誤し、繰り返し練ることが必要である。

臨書、創作に共通する作品としての考え方は、目指す方向性としての近代や現代の書作品の参考であろう。選択した理由、書体、書風の特徴、いつの時代の作品でどのような評価があるものかを踏まえた検証により、学習者は、現代に、より相応しい方法を開拓してゆくことができよう。特に、現代の書表現としての作品の意義を積極的に考慮し、制作目的や意図、作品の現代性、主張、独創性等を明確にし、以上のことが一貫した自然な取り組みであるかを検証することが、その後への課題となる。これらの模索によって、臨書による発見を創作に活かし、また、創作における課題を臨書により深めることにより、作品としての存在意義を意識した相関関係が見いだされ、作品の再構築を図ることができる。

おわりに

書作品としての現代的意義や価値は、臨書、創作の相違には依拠しない。臨書においては、原本の風韻をいかに伝えるか、再現されるかが本義であるが、古来、創造性に富む個性豊かな臨書作品が見られ、創作と同等の評価に値し鑑賞に堪えうるものも存するのである。書の創作においては、その意義や価値には当に独創性が問われる。文字がそもそも人工的なものであることを考えてみると、書の創作においても、文字の構造を活用するに始まる点では臨書的な意味合いがある。元を辿れば、源流となる何かしらの古典に行き着く。

書の作品制作における学習は、その形成過程における必然性を考えてゆくと整理されやすい。臨書作品を制作する意義は、創作への制作プロセスに見立てる役割があろう。そこで、作品として、古典を再構成し直すところに創意工夫を生じさせる。さらに、臨書作品が、創意に満ちた作品として成立する可能性がある。原本を再構築しながらも、現代的意義を加味してゆくことが、創作への道筋となる。臨書と創作の相関には、臨書による古典の普遍的基盤を通して創

作の方向性が確認でき、また、創作の際の課題を臨書により明確にしてゆく作用が繰り返されてゆく。

文 献

中村二柄『東西美術史—交流と相反—』岩崎美術社、1994年。

西林昭一・杉村邦彦・浦野俊則編『歴代名家臨書集成』本巻・別巻、柳原書店、1988年。

野中吟雪「書式」『書学大系』研究編14書式と表装、同朋舎、1986年。

井島勉『書の美学と書教育』墨美社、1975年。

萱のり子『書芸術の地平—その歴史と解釈—』大阪大学出版会、2000年。

奎星会編『上田桑鳩—書・現代への提言』毎日新聞社、1999年。

『芸術文化 卒業作品集』2003・2004、広島文教女子大学人間科学部 美術・書道研究室。